

(翻訳) 愈芳著『我記憶中的魯迅先生』

秋吉, 收

九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学

<https://doi.org/10.15017/6796488>

出版情報：言語科学. 42, pp.91-107, 2007-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



(翻訳) 兪芳¹⁾ 著『我記憶中的魯迅先生』

秋吉 收 (Shu Akiyoshi) 訳

【訳者解題】

『魯迅日記』1923年8月2日に、“下午携婦遷居磚塔胡同六十一号”（午後に妻を連れて磚塔胡同61号に転居す）と記されているが、この“磚塔胡同61号”が、兪芳著『我記憶中的魯迅先生』の舞台となった、北京における魯迅の三番目の寓居である。魯迅日記の体裁に違わず、簡潔で無味乾燥な一文であるが、このたった14文字の中には、魯迅に最も近い人間二人との複雑な関係が凝縮されていた。

一人は、魯迅の弟周作人（1885-1967）である。日本留学時代より助け合って新文学運動、啓蒙活動に邁進してきた兄弟は、文学とは無縁の人間関係のもつれによって、1923年7月に絶交する。魯迅は住み慣れた八道湾の四合院を追い出され、1924年の5月に西三条の家（現在の魯迅故家）を買い求めるまでの一年足らずの日々を兪芳たちと共にこの“磚塔胡同61号”で過ごすことになる。

もう一人の人間とは、“婦”つまり妻たる朱安²⁾である。本人の意志は全く尊重されない、旧社会の不幸な結婚によって結ばれた魯迅と朱安は、多分に魯迅の強烈な個性にもよるが夫婦らしい幸せを享受することはなかった。一貫して「母の嫁」と呼び、朱安を妻とは認めなかった魯迅は生涯に二度だけ朱安のことを日記に書き留めている。1914年11月26日“下午得婦來書、・・・頗謬”

（午後には妻からの手紙を受け取る、・・・誤りが非常に多い）と、文頭に引用した1923年8月の二箇所である。この結婚については、封建的因襲を背負う魯迅の苦難の一つとして繰り返し言及されてきたが、朱安の素顔を語る者は誰もいなかった。その朱安を人間として初めて取り上げたのが、この兪芳の『我記憶中的魯迅先生』、中でもその最後の一章「封建婚姻的犠牲者—魯迅先生和朱夫人」であった。魯迅研究に新たな一頁を開いたと言っても過言ではないだろう。

1981年に兪芳のこの文章が出版されて後、大きな反響を呼び、日本でもたとえば三宝政美著『悩める家長 魯迅』（1988年）など、朱安の側から魯迅の負の側面を照らし出した論著も発表された。ただ、兪芳の文章中、朱安の感情が吐露された部分は確かに刺激的であるが、それ以外の文章も生き生きとして非常に魅力的で、魯迅の新たな一面が垣間見られて興味深い。それはまさに、増田涉『魯迅の印象』「序」の次の言葉を彷彿とさせるものである。

文章でみる魯迅と、直接話しあつてゐるときの魯迅とでは、ちよつと勝手がちがふやうな気がした。深刻めいた顔つきや言葉づかいをせず、いつも軽いユーモアをとばしてニコニコしてゐ

¹⁾ 兪芳（1911-） 浙江省紹興の人（実際には東北生まれの北京育ち）。兪英崖の次女。1923年8月から翌1924年5月まで、北京磚塔胡同61号にて魯迅と共に過ごす。1926年に魯迅が北京を離れた後も、西三条胡同の魯迅家にたびたび赴き、魯迅の母魯瑞の手紙の代筆を務めるなど一家を手助けした。1935年7月、北京師範大学数学系卒業。杭州にて中学教師となり、のちに学軍中学校長も務めた。

²⁾ 朱安（1878-1947） 1906年、日本留学から一時帰国した魯迅と結婚。母魯瑞が魯迅に無断で婚約を決めたもので、魯迅は日本から婚約解消を要求、その後、纏足をほどくこと、学校に行くことを要求するがいずれも聞き入れられなかった。詳細については、『我記憶中的魯迅先生』の最終章「封建婚姻的犠牲者—魯迅先生和朱夫人」に譲る。兪芳の文中では、「大師母」と呼ばれる。

る氣のおけない人であつた。一しよに向ひあつてゐて、緊張感などを私は感じたことはなかつた。文章にみる皮肉や毒舌は影さへなく、むしろ子供のやうに天真な人柄であつた。¹⁾

*

俞芳著『我記憶中の魯迅先生』全体はかなりの長編である。以下に各章の題名を挙げると、

- ・(周建人) 序
- ・我記憶中の魯迅先生
- ・和魯迅先生相处的日子
- ・魯迅先生在磚塔胡同的幾件趣事
- ・北京磚塔胡同六十一号——魯迅先生住過的地方
- ・第一次到魯迅先生的新屋作客
- ・魯迅先生和人力車工人——讀「一件小事」想起的
- ・學習，榮譽和金牌
- ・“三・一八”慘案時的魯迅先生
- ・魯迅先生的母親——魯太夫人²⁾
- ・太師母到我家避難
- ・太師母談魯迅先生
- ・太師母談魯迅兄弟
- ・我代太師母給魯迅先生写信
- ・在太師母身邊的日子里
- ・封建婚姻的犧牲者——魯迅先生和朱夫人
- ・(俞芳) 後記

今回訳出したのは、周建人の「序」と第一篇「我記憶中の魯迅先生」であるから、全訳となると先は長い。回想記という性格、また全編を系統立てて書いたのではなく、話題毎に書きためていったという成立事情から、内容的な重複も見えるようだ。どのように訳していくかについては今後の課題としたい。

参考まで、俞芳に関する参考文献を以下に挙げる。収集整理の過程であり、少しずつ充実させていければと考えている。また、俞芳による磚塔胡同 61 号の説明図を挙げる。

俞芳関係書籍・論文目録(稿)

* 俞芳単著

1. 俞芳著『我記憶中の魯迅先生』(1981年、浙江人民出版社)
2. 『魯迅回憶録(專著)』(1999年、北京出版社)、1465頁。
* 「1」をすべて(周建人「序」、俞芳「後記」含む)収める。
3. 蕭紅・俞芳等著『回望魯迅 我記憶中の魯迅先生——女性筆下の魯迅』(2002年、河北教育出版社)、164頁。 * 「1」から、「序」と「後記」を除いた本文をすべて収める。

¹⁾ 増田渉『魯迅の印象』「序」(1956年、大日本雄辯會講談社)。

²⁾ 魯太夫人 魯迅の母、魯瑞(1858-1943)。紹興郊外、安橋頭の生まれ。四男一女を生んだが、魯迅三兄弟以外、娘(零歳)と末息子(六歳)は夭逝した。開明的な女性で、清末の纏足反対運動の時には進んで纏足をほだき、また北伐成功時には、髪を短く切った。俞芳の文中では、「太師母」と呼ばれる。

* 俞芳の文章等

- ・ 俞芳「我記憶中的魯迅先生」 1977年『杭州文芸』第11期。(未見)
- ・ 俞芳「北京磚塔胡同六十一号(魯迅先生一九二三年八月二日—一九二四年五月二十五日住過的
地方)」 ・ 俞芳「第一次到魯迅先生的新屋作客」
* 以上二篇、『魯迅研究資料(9)』(1982年、天津人民出版社)、185頁、195頁。二篇は、
上掲「1」『我記憶中的魯迅先生』(1981年、浙江人民出版社)に収める文章の再録。
- ・ 俞芳「珍貴的記憶——魯迅的母親遺影」(『東海』1982年第11期、51頁。『中国人民大学
復印報刊資料 魯迅研究』1982年第12期、23頁。)
- ・ 俞芳「魯迅三弟——周建人」 『魯迅研究資料(19)』(1988年、中国文聯出版公司)、204頁。)
- ・ 俞芳「信子与芳子」 『上海魯迅研究(2)』(1989年、百家出版社)、78頁。
- ・ 俞芳親筆(1999年)“魯迅先生永遠是我們學習的榜樣!” 『紹興魯迅研究』2001年第一期(総
第23期)口絵。
- ・ 吳克剛口述、俞芳・金鏘整理「魯迅先生在浙江兩級師範学堂」(『杭州大学学报(哲社)』1979
年第2期、135頁。『中国人民大学 復印報刊資料 魯迅研究』1979年第7期、175頁。)

* 俞芳訪問記

- ・ 雪融「俞芳訪問記」 『上海魯迅研究(五)』(1991年、百家出版社)、234頁。
- ・ 秦軍「訪魯迅在北京的隣俞芳先生」 『紹興魯迅研究專刊』1999年総第21期、163頁。

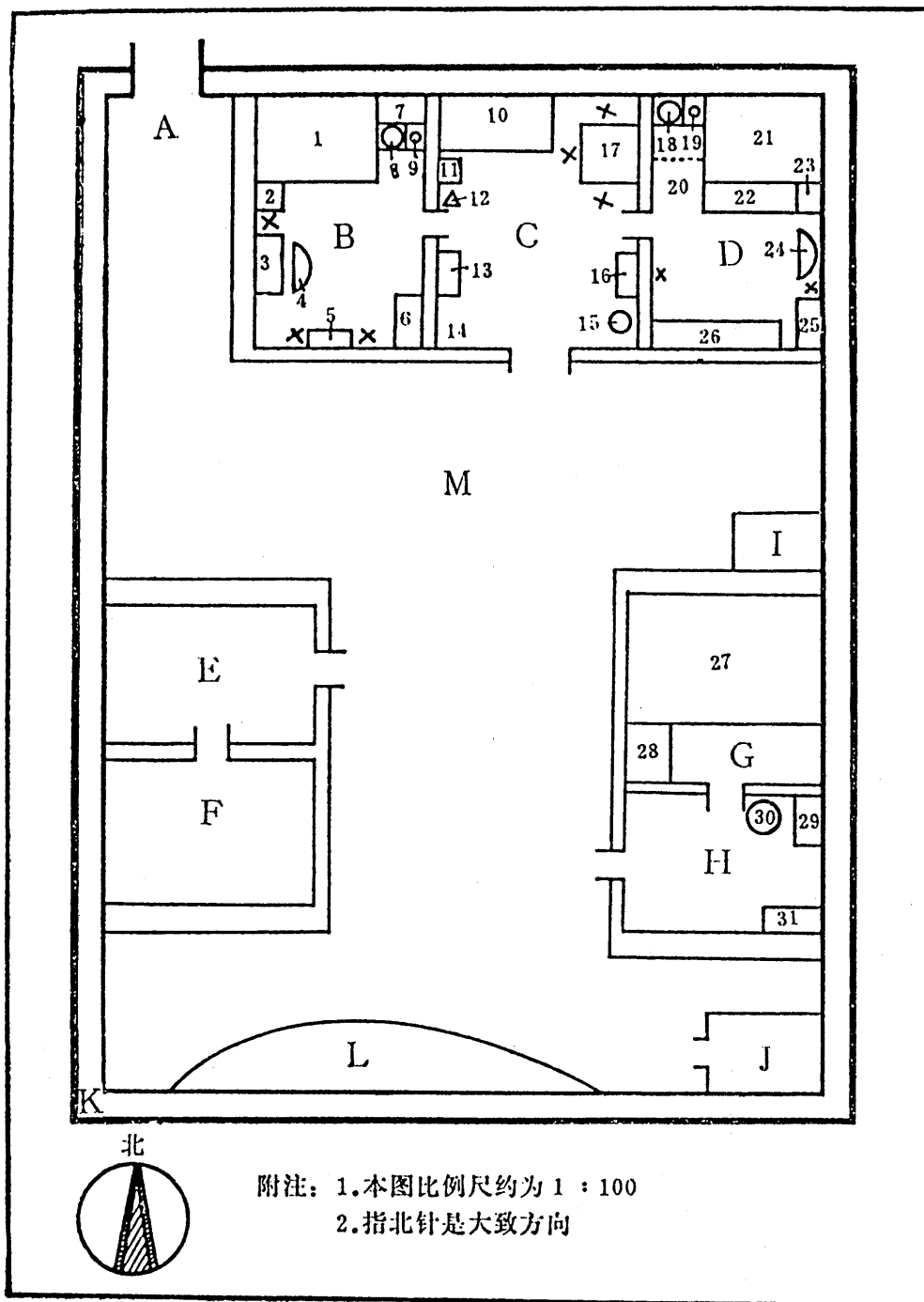
* 俞芳、磚塔胡同に関して参照した主な参考文献

- ・ 許羨蘇¹⁾「回憶魯迅先生」(1961年6月30日於北京) 『魯迅研究資料 3』(1979年、文物
出版社)、199頁。
- ・ 許欽文²⁾『魯迅日記』中的我 1979年、浙江人民出版社。 『魯迅回憶錄(專著)』(1999
年、北京出版社)、1221頁。
- ・ 『魯迅生平資料匯編 第三輯』 1983年、天津人民出版社。
- ・ 『魯迅全集』 2005年、人民文学出版社。
- ・ 『魯迅全集』 1984~86年、学習研究社。
- ・ 竹中憲一著『北京における魯迅』 1985年、不二出版。
- ・ 三宝政美著『悩める家長 魯迅』 1988年、日中出版。
- ・ 『中国現代文学事典』 1985年、東京堂出版。
- ・ 藤井省三著『魯迅事典』 2002年、三省堂。

¹⁾ 許羨蘇(1901-1968) 又の名を瓏蘇(『魯迅日記』にはこう作る)、字は淑卿。浙江省紹興の人。許欽文の四番目の妹で、紹興女子師範学校での周建人の教え子。後に進学のため北京に到り、八道湾の魯迅家に一時滞在した。魯迅が北京を離れた1926年から1931年まで西三条の魯迅家に同居して一家を助ける。『魯迅日記』によれば、魯迅から彼女へ宛てた手紙は二百通余りに上る。なお、許羨蘇は、俞芳の姉俞芬の親しい友人で、「回憶魯迅先生」の中には、俞芳たちが磚塔胡同61号に住むに到った経緯が語られている。“…不久发现俞芬在女高师附中上学,就时常同她一道去,因为她也是绍兴人,也是建人先生在绍兴女子师范教书时候的学生。她能说流利的北方话,也能说道地的绍兴话,并且善于买东西,炒好吃的绍兴菜。虽然因为死了母亲带着两个幼小的妹妹寄住在她父亲俞英崖先生的朋友家里(即砖塔胡同六十一号),但她天真活泼,是一个喜欢交际的超龄的中学生。”

²⁾ 許欽文(1897-1984) 本名繩堯、欽文は筆名。紹興の人。1920年の冬から北京大学にて魯迅講義を聴講し、23年には孫伏園の紹介で魯迅の面識を得る。魯迅の指導の下、小説創作に取り組み、郷土文学の秀作『故郷』(1925)などを書いた。

鲁迅先生住北京砖塔胡同六十一号 时院内全貌及室内陈设平面示意图



附：平面示意图说明

当时的砖塔胡同六十一号，是一所道地地地的北京老式砖木泥土结构的简易平房。大门是两扇木门，门上有两句对联，黑底红字，上联是：“忠厚传家久”，下联是：“诗书继世长”。院内有七间瓦房：北屋三间，东屋、西屋各两间。北屋是砖地，东屋、西屋都是泥地。北屋三间中的东、西两间的南面各有装着固定的小玻璃的窗子两扇。中间那间屋子除正中朝南有两扇木门外，是简易花格窗，糊着窗纸，没有玻璃，白天门开着时有亮光，关上门，屋内光线很暗。院子南面有一个小土堆，鲁迅先生发现，它过去是花坛，年久失修，倒塌了，渐渐变成这个样子。经他指点，细看下面，有些地方，还有花坛的遗迹。

一、院内和房间的布局：

A、大门。 B、大师母（宋夫人）的卧室。 C、鲁迅先生的会客室、卧室、夜里工作兼全家吃饭的屋子。 D、太师母（鲁太夫人）的卧室。 E、F、我们姐妹三人的住屋。 G、鲁迅先生家的保姆王妈和我们家的保姆齐妈的卧室。 H、两家合用的厨房。 I、鸡窝。 J、厕所。 K、墙身。 L、小土堆。 M、天井。

二、鲁迅先生家中屋里的陈设：

1. 大师母的床。 2. 小柜子。 3. 三屉书桌，鲁迅先生白天工作的桌子。 4. 藤椅。 5. 两屉桌。 6. 柜子（桌式柜）。 7. 箱子。 8. 马桶。 9. 木杓斗（洗手用）。 10. 鲁迅先生的木板床。 11. 书箱。 12. 衣架（高五尺多）。 13. 两屉桌或书架（记不清了）。 14. 门后放着门闩和晒衣竹竿等。 15. 小水缸。 16. 桌式洗脸架。 17. 八仙桌。 18. 马桶，外有马桶箱。 19. 木杓斗。 20. 布帘子。 21. 太师母（鲁太夫人）的床。 22. 床前脚踏板。 23. 床头茶几。 24. 藤椅。 25. 桌式柜。 26. 藤躺椅或木椅（记不清了）。 27. 大炕。（王妈和齐妈合用的炕）。 28. 大木箱（王妈和齐妈放衣服用的）。 29. 鲁迅先生家的切菜桌。 30. 鲁迅先生家的水缸。 31. 鲁迅先生家的灶。

附注：鲁迅先生一家住的三间北屋内，共有木椅子八张，它们经常的位置在图中用“×”表示，但有时要搬动的。

周建人¹⁾「序」

(1981年9月9日『文匯報』原載。原題は「魯迅是很喜歡兒童的。」)

魯迅は周作人と決裂して後、八道湾の屋敷から出て来るや、すぐに磚塔胡同61号に移ってしばらく住んだが、それは1923年8月初旬のことであった。磚塔胡同に住んだのは、翌年の5月下旬までである。その期間は長くはなく十ヶ月に満たないが、しかし確かに魯迅の生活において、ある特殊な時期であった。

魯迅は八道湾にいた時に『中国小説史略』を書き始めている。彼はその頃、南側の部屋を使っていたが、部屋の書架の上、机の上、オンドルの上にはすべて各種の小説が積み上げられていたのを覚えている。だが編纂、出版の仕事は磚塔胡同のあの雑然として騒がしい小部屋で成されたのだった。そこで、彼はまた『彷徨』に収める「祝福」、「酒樓にて」、「幸福な家庭」それに「石けん」の四篇の小説を書き上げた。さらに、このわずかに九ヶ月余りの間に、彼は『嵇康集』の校勘を仕上げ、「宋民間のいわゆる小説およびその後」を書き、「ノラは家を出てからどうなったか」と「天才の出る前」といった重要な講演等を行ったのである。

磚塔胡同に住んでいた時期はまた、魯迅の生活が最も苦難に満ちた時期でもあった。魯迅は周作人と日本の女²⁾の侮辱を受けたことで、ひどく体調を崩し、それが一ヶ月余り続いた。だが彼は頑強に病気と闘った。彼は病をおして北京大学、北京高師(のちの師大)、北京女高師(のちの女師大)および世界語学校へ出講し、街中を奔走したのである。帰宅後も夜な夜な机に向かって筆を執り、朝まで床につかぬ事もしょっちゅうだった。落ち着ける住処を求めて、彼はあちこち探し回り、阜城門内西三条にて一軒の古ぼけた四合院をついに見つけた。そこで友人に借財をして買い求め、それからまた大工を雇って修繕するなど、明るく年の初夏までかかって引っ越し、そこでどうにかやや平穩を取り戻すことができたのだった。

魯迅がこの時期に書いた作品についてはすでに皆さんもご存じの通りである。だが、彼のこの時期の生活状況を知っている者は決して多くない。俞家の三姉妹(俞芬、俞芳、俞藻)³⁾は魯迅と磚塔胡同にて九ヶ月余りともに過ごし、その後もしばしば西三条胡同へ行き来していた。魯迅が南下した後も、俞家三姉妹はまたよく魯迅の母親の世話をしに行っており、そういうわけで、彼女たちは、魯迅の当時の情況について熟知している。このたび、俞芳同志が当時の状況を回想して記録したことは、非常に有意義であり、魯迅研究における貴重な資料である。

魯迅は子供をとっても愛していた。彼は子供を民族の未来、中国の希望であると見なしていた。彼は子供に対して正しい教育を施さねばならないと考えていたのである。彼は二種類の誤った教育方

1) 周建人(1888-1984) 字喬峯。魯迅の二番目の弟。紹興の小学校長、女子師範学校生物教員を経て、1919年に母らと共に北京へ転居、八道湾にて魯迅、周作人(上の弟)と同居する。1921年、上海に赴き商務院書館の自然科学書編集者となる。建国後は、高等教育部副部長、人民代表大会常任委員会副委員長などを歴任。また、『略講魯迅的事情』(1954)、『魯迅故家の敗落』(1984)などを書いた。

2) 周作人の妻、羽太信子を指す。

3) 俞氏三姉妹 俞芬(1899-1960) 俞英崖の長女。紹興の人。1923年当時、北京女子高等師範附属中学に在学。1924年卒業後は家庭教師を勤め、時折北京大学にて魯迅の授業を聴講した。俞芳 次女。俞藻(1913-) 三女。1924年に培根小学校入学の際、魯迅が保証人となる。1933年春に北京女子大学附属中学に在学。

法に反対した。一つは暴力に訴えるやり方で、子供を殴るのでなければ罵り、その結果子供は小さい頃からおどおどして声も小さく、目付きはどろんとして生氣なく、おつむも愚鈍であるが、親の方は聞き分けがよいと逆に喜ぶ始末。こうした子供には成長した後も独立した思考が身につくはずもなく、進取の氣象も望み得ない。もう一つは放任主義で、わがままに甘やかして育て、子供は家庭の王様となり、欲しいと言えば親は何でも買い与える。だが、独立して一步社会に踏み出すや、全く役に立たぬは言うまでもない、何一つできぬのであるから。魯迅は次のように考えていた。子供に対しては、順序立てて丁寧に教え導かねばならない。彼らに科学と文化の知識を教え、物事の道理をきちんと理解させることが肝要である。親は子供の心の世界に精通し、彼らが興味を覚えるもの、愛するものを把握しておかねばならない。子供は天真爛漫かつ活発で、遊びを好み、美を愛する天性を有し、想像力に満ち溢れているのだ。親はこうした特徴に基づき、豊富な精神という栄養でもって彼らを育み、彼らを健康かつ生き生きと発展させ、高尚で優秀なる人間へと成長させねばならない、と。兪芳同志は少女の頃に魯迅と過ごした日々を回想しているが、これらの回想の中に魯迅の教育思想を垣間見ることができ、それは今日の親たちにとってやはり極めて有意義なものである。

今年は魯迅生誕百周年に当たる。兪芳同志の回想録『私の記憶の中の魯迅先生』は、魯迅自身にとって最高の記念となるだろう。

(1981年3月10日於北京)

「我記憶中の魯迅先生」

今年の9月25日は、偉大な文学者、思想家、革命家である魯迅先生の生誕百周年の記念日に当たります。私は十二、三歳の時に魯迅先生と知り合い、先生が北京を離れるまでずっと、しょっちゅうお会いし、先生の温かいお心遣いと心のこもったご指導を受けました。その後、魯迅先生が二回北京に戻られた時も、私は必ず訪ねていき、さらに先生の講演を聴きました。魯迅先生が亡くなられてからもう45年になりますが、この45年の間も、先生の生前の教えは、いつも私の耳元に鳴り響いております。いま当時の情景を回想すると、感情の高まりを抑えることができません。先生に対する敬慕の気持ちのごくわずかを寄せることができるに過ぎませんが、ここに少しばかりの思い出を綴ります。

魯迅先生が磚塔胡同におられた頃

母が亡くなった後で、姉は私と妹を連れて北京に勉強しに行くことを提案し、父もそれを了承しました。だが姉は当時まだ二十歳そこそこで、私は八歳、妹は六歳でした。女の子三人、荷物を抱えてハルピンから北京まで赴くことに、父は不安を抱き、このことを同僚の鈕おじさんに相談しました。鈕おじさんは南方出身で、当時は父と同じハルピン中東鐵路局で働いていましたが、家族は北京に残っていたのです。彼の北京の住まいは賃貸で、場所はすなわち磚塔胡同61号でした。鈕

おじさんの家には、おばさん以外に、やはり八、九歳の一人娘がおり、そのほかにお手伝いさんが一人いました。七つの部屋は鈕おじさん一家にとっては少々広すぎましたので、父は鈕おじさんと相談して、おじさんが家族に会いに北京へ行くついでに、私たちを一緒に連れて行ってもらうことになりました。こうして私たちは北京に到着するとすぐに磚塔胡同61号で、鈕おばさんたちと同居することになったのです。それから二年ほど経って、鈕おじさんは南方に仕事を見つけて、家族ともども帰って行かれ、彼らが住んでいた北側の三部屋は、王劍秋おじさんが借りて住むことになりました。一九二三年の春、王おじさん一家は青島へ越して行かれ、彼らの住んでいた北側の三部屋はその後ずっと空いておりました。一度、姉たちが魯迅先生のお母様（原文「太師母」：秋吉注）をうちへ食事にお招きしました。テーブルは北側の部屋へしつらえましたので、お母様は、「この三部屋はどうして空いているの？」とお尋ねになりました。姉は、「適当な間借り人を見つけれないからですわ。借りられる方がもしも悪い人ですと、入居されるのは簡単ですが、出て行って頂くのは容易ではありません。」と申しました。こういうわけで、私たちの住む磚塔胡同に北側三部屋の空きがあることを、先生のお母様もよくご存じだったのです。

その後、大先生（私たち三姉妹の魯迅先生に対する呼び方——以下同じ：原文も「大先生」）と二番目の先生（周作人）が仲違いされ、大先生はもう八道湾に住み続けることを望まれませんので、できるだけ早く引っ越されるおつもりでしたが、すぐには家が見つからず、焦っておいででした。大先生がお母様に相談されると、「兪芬三姉妹の住んでいる四合院の、北側の三部屋が空いているが、ただ部屋も狭く、ここよりもボロだからねえ・・・。」と言われます。大先生はこれを聞くと、家の良し悪しは関係ない、いまは少しでも早く出て行ければよいのだからと仰いました。なぜなら、一つには仮の宿りであること、二つには緊急を要すること、またお隣が同郷人であり、三番目の先生（周建人）の学生であって、しかも兪芬姉妹の父親の兪英崖¹⁾さんは、蔡元培²⁾先生の紹介で大先生とも面識があることを考慮されたのです。実際に部屋を見られたのち、ひとまず磚塔胡同に移ってしばらく住みながら、適当な家を探して再度正式に引っ越すことに決定されました。そこで先生のお母様はすぐに、大先生の学生だった孫伏園³⁾さんと許欽文さんと呼んで許羨蘇さんに私の姉と相談させました。姉は大先生ご一家が引っ越して来られることを聞き、もちろん賛成しました。以上、大先生、奥様（すなわち朱夫人：原文「大師母」）が磚塔胡同に移って来られた経過と状況については、大先生のお母様が後になって私に話されたことです。当時、私と妹はまだ幼かったので、よくはわかりませんでした。

それは七月下旬のある夜のことでした。姉は私（当時満十二歳）と妹（当時満十歳）を目の前に呼び、興奮した様子でしかも厳肅に次のように言いました。「大先生ご一家がもうすぐ引っ越して来られる。彼らは静かな環境を好まれるから、今後おまえたちは騒がしくしてはならない。必ずおとなしくしておくのよ。」姉は私たちがすぐには返事をしないのを見るや、こう脅しました。「言う

¹⁾ 兪英崖（1876-1955） 浙江省紹興の人。兪芬姉妹の父。1912年には吉林省延吉県の知事。所用で北京に出た際、魯迅と知り合う。

²⁾ 蔡元培（1868-1940） 紹興の人。1890年に進士合格、翰林院編修に補せらる。その後、官途を捨て反清革命に参加、光復会を指導、革命同盟会に加入する。欧州遊学より1916年に帰国後、北京大学校長に就任。1920年には魯迅を講師に招く。要職を歴任して、日中戦争勃発後、香港にて病没。

³⁾ 孫伏園（1894-1966） 紹興の人。魯迅の山会初級師範学堂（紹興。魯迅が辛亥革命後、南京政府に招聘されるまでの一時期勤めた。）時代の学生。1921年、北京大学国文系卒業。1920年代には『晨报副刊』『京報副刊』『語絲』などの編集者として魯迅の作品発表を強く支えた。

ことを聞かないなら、私のほうきの柄に注意することね！」私は思いました。あそこのおばあさまはうちに來られたことがあるが、とても優しい老人で、子供のことをとても好いていらっしやる。あのおばあさまの長男というのはいったいどんな人だろう。お姉ちゃんの口ぶりからすると、恐らくかなり“おっかない”に違いない。そこで私は決心しました。今後はより注意深く行動し、軽はずみな行いを慎んで、自分から災いを招かないようにしよう、と。

八月二日の午後に、大先生ご一家は引っ越して來られました。引っ越し当日、大先生は白い夏服の長衫（チャンシャン：単衣で丈の長い中国服）を身にまとい、短いひげを蓄えられて、厳肅な雰囲気です。少しの笑顔もありませんでした。その時私は本当に少し怖い感じがしました。私と妹は前方へ歩み出ると、「大先生、ごきげんよう。」と一声挨拶し、彼に向けて深々とお辞儀をしました。さらに隣に立っておられた奥様にもお辞儀をすると、すぐに自分達の西側の部屋へと駆け込みました。それでも好奇心旺盛な私は、窓からこっそり外の彼らを覗いていました。それから続けて数日の間というものの、軽々しく近づくことはできませんでした。しかしさらに数日経つと、状況に変化が現れます。私はまず大先生が私たち子供の行動にとっても気を配っておられることに気付いたのです。私は中庭の南側の少し盛り上がったところに一本の“一枚葉の里芋”を植えていましたが、そのことにそれまで誰も注意を向けたことはありませんでした。しかし大先生は引っ越してこられるや、すぐに私にこう尋ねられたのです。「どうしておまえの植えた里芋にはいつも葉っぱが一枚しかないんだね？」私は言いました。「新しい葉が出て来ると、それは柔らかくて、鮮やかな緑色です。でも古い葉は色もくすんでいて、醜いわ。だから古い葉を摘んでしまうのです。」大先生が言うには、そんな風にしたら、里芋は決して育たないよ。これからは古い葉を摘んではいけないよ。その時、私の傍にいた姉は我慢たまず、「バカね」と私に毒づいていたのですが、大先生は逆に微笑みながら、子供には必ず子供なりの考え方とやり方があるものだ。彼らの幼稚でおかしな行為に対しては、道理を話して聞かせねばならない。頭ごなしに責めたり叱りつけたりしては、なんの解決にもならないのだよ、と仰いました。

越して來られてほどなく、大先生は私と妹にそれぞれ一箱の積み木をプレゼントされましたが、それ以外にも普段からいつもキャンデーやお菓子を買って下さいました。私たちは素敵なおもちゃで遊び、美味しいキャンデーを頬張りながら、次第に大先生は“おっかない”ないばかりか、穏やかで親しみやすいおじさまだと感じるようになっていたのです。こうして私たちは、姉の垂れたあの“戒め”や、恐るべき“ほうきの柄”等のことはすっかり忘れてしまったのでした。

大先生は子供に対して一度も威張って見せたことはなく、とても民主的な方でした。私の生年の干支はイノシシで、妹は牛でしたので、先生は私たちを、“野豚ちゃん”“野牛ちゃん”と呼びました。長幼の序をちっとも解さない私たちは彼を“野蛇さん”（大先生の干支は蛇でした）と呼びました。こうしたことは、いまならそれほど珍しくもありませんが、半世紀余りも前の旧中国にあって、子供がこのように大人に対することは、極めて礼儀にもとった行為であると見なされました。それでも先生は怒らないばかりか、笑いながら私たちに尋ねました。「蛇にも野生じゃないのがあるのかね？」、と。その一言にみんなは大笑いしたのでした。

大先生はふだんとても忙しくしておられましたが、私たちが手助けを求めたり、あれやこれやとお願いした時はいつも、断られないばかりか、必ず迅速にそして真剣に対処して下さいました。当時、大先生のお母様と大先生はいつもタバコ箱の中の図柄入りの紙と、それに銀紙の裏の当て紙を私たちに分けて下さいました。私はそれらの当て紙を綴じて小さなノートを作り、一篇の童話を書

いたのですが、文章はもちろんわけのわからない、虎だとか兎だとかの動物たちをでたらめに登場させたものでした。先生に手直ししてもらえないかとお願ひしましたところ、先生は快く引き受けて下さり、次の日にはもう出来上がっていました。私は鉛筆で書き、先生は筆で修正されました。誤字脱字は訂正され、もちろん文章も筋の通ったものになりました。私は句読点の付け方も知らなかったのですが、先生が付けて下さいました。できるだけ私の元の文章を生かそうとされたためでしょう、全編にわたって変更箇所はそれほど多くはありませんでした。その上、私に返される時、ひとことふたこと激励の言葉もかけて下さり、私は本当に嬉しく思ったものです。

その頃、私たちは色付きの油紙で“お人形”を作るのに夢中でしたが、人形の顔を描くのが苦手で、大先生に描いてもらいました。こんな小さなことでも、先生は即座に承知して下さい、しかも私たちに具体的な要求を出すように言われました。例えば、頭の大きさはどうだとか、男か女か、年齢はどのくらいか等々。先生は時にはその場ですぐに描く“スピード仕上げ”の時もあれば、夜に描いて、次の日に渡して下さいさることもありました。先生の描き方はとても真面目で、お上手でした。先生は決して拒否されませんでしたし、いつもうまく描いて下さったので、私たちはやはりしょっちゅう先生のお邪魔をしていたわけです。

当時、私たちは篤志小学校に通っていました。ある時、私たちのクラスの地理常識担当の先生が、何人かの学生に、家の人に頼んで各省の省都、主要産品、気候等々を筆でカードに書き込んでくるようにとの宿題を出しました。私と妹は長江流域各省の割り当てになり、すぐに大先生にお願ひしました。大先生は私たちにカードの用紙を提供されたばかりか、整った楷書で書いて下さいました。出来上がったカードの組を受け取った時、私たちはどんなに嬉しかったことでしょう。そして次の日、学校に着くとすぐに先生に渡しました。先生は私の提出したカードが特に優れていると言われ、クラスで私たちを褒めて下さいました。帰宅してから、私たちが大先生にこのことを告げると、先生は微笑みながら言われました。「私の書いたカードがおまえたちの先生に褒められたんだって？ それは誠に光栄の至りだ。」このカードはそれから学校の展覧会に出品された後、学校に保存されることになりました。大先生はそのことを知ると、またユーモアたっぷりに、「それは誠に光栄の至りだ。」と仰いました。

ある時、姉は不在で、私と妹は学校が引けて帰宅してから、自分達の部屋で宿題をしていたのですが、私は鉛筆を削る時にうっかりして削りくずが目の中に入ってしまった。妹を呼んで“吹いて”もらったのですが、いくら吹いても出てきません。私はあわてて手でむやみにこすったところ、こするほどに痛みは増し、目は充血して泣いた後のようになってしまいました。いったいどうすれば？ 急いで大先生の奥様のところへ行ったのですが、奥様も吹き出すことはできません。目は激しく痛みますが、でもどうすればよいのでしょうか。私はとても焦りました。そこへ折よく、大先生が仕事から帰ってこられました。大先生は私が両手で目を覆っているのを見ると、どうしたんだね、と優しく尋ねられました。私は泣きべそ顔で、さっき起こったことを告げました。大先生は私を慰めながら、焦ってはいけない、私がちょっと見てあげようと言われました。先生は見て下さると、奥様に頼んで、よく洗って熱湯にひたした急須に冷ました湯を入れ、その急須のお湯で私の目をすすいで下さいました。ひとしきりすすぐと、どんな具合かね、と私に尋ねられます。私は、だいぶ良くなりました、でもまだ少し痛みますと答えました。すると大先生はもう一度私の目をちょっと調べてからこう言われました。削りくずはほとんど流れ出てしまったよ。まだ痛むのはおまえが自分で力を入れてこすったので削りくずがまぶたを傷つけてしまったからだろう。しばらくす

れば、きっと良くなるよ、と。

しばらくたって、晩ご飯を食べ終わった頃には、目は痛くなくなっていました。私が大先生のお部屋へお札を言いに行くと、大先生は微笑みながら、「お札なんか必要ない。ただ今後は何ごともしっかり注意しなければならない。鉛筆を削る時、特に芯を削る時は、できるだけ目から離すこと。もしも砂ぼこりや削りくずなどが目の中に入ってしまったら、決して手でむやみにこすってはいけません。そっとハンカチでまぶたを押さえ、ゴミを目じりまで移動させて、それから拭くのがよい。最も良い方法は、やはり洗い流すことだ。」と言われました。最後に先生は私に目を保護することの重要性について簡単に話され、目を大事にするように仰いました。大先生は面倒がらずにすぐに私の目を治療して下さい、私たちが目を守るよう気遣って下さったのでした。私はこの慈愛にあふれた心優しい人生の先輩に、どんなに感謝していることでしょうか。

大先生は、遊びを好むことと好奇心が子供たちの特徴で、それをむやみに阻止すべきでないのはもちろん、多方面から啓発を与えて彼らの知的欲求を満たしてやらねばならないと考えておいででした。

ある日のこと、大先生のお母様が紹興に伝わるある遊びを教えてくださいました。陰暦七月七日に、刺繍針を水（お椀に入れておいた水）の中に投げ入れると、沈んでしまわずに、太陽の光に照らされて、お椀の底にさまざまな影を映し出す。この影は針を投げ入れた人の将来や運命を暗示しているのだ、と。さらに、水は、七日前にお椀に汲んで中庭に置いておき、日光に晒し、月の光に当て、風に吹かせ、雨に打たせておくのがよいとのことでした。このお話に私と妹はこの上ない興味を覚え、ずいぶん早くからお椀の水を用意して、中庭に置いておきました。七月七日当日のお昼ごろ、先生のお母様と奥様、それに私たち三姉妹は、皆それぞれお椀の中に刺繍針を投げ入れました。果たして、針は沈まずに、陽光の下でお椀の底にはさまざまな影が浮かび上がりました。私たちは大先生にも一本投げ入れるようお願いしました。私たちはすぐに、影はこれに似ているとかあれに見えるとか好き勝手に想像して言いました。私は影は筆に似ていると言い、妹は柄のついたはさみだと言います。大先生はそこで次のように分析して教えてくださいました。水は長い間外に出しておいたので、表面には砂ぼこりが浮いて層となり「膜」を形成したのだ。刺繍針はもともと軽いのでこうして水に浮かべることができる。影については、周りにいる各人の立っている角度がさまざま、また針を投げ入れる人の投げ入れる角度も異なること、加えて水面の砂ぼこりによって光が屈折し、その結果いろいろな形の影が現れるのだ。影が何かに似ているというのは人それぞれの解釈にすぎず、運命や将来を暗示しているなどは根拠のないことなのである、と。

続けて、大先生は私たちに尋ねられました。「火はどうやって点けるか知っているかね」、と。私はすぐさま、「マッチで点けます」と答えました。大先生は「その通り」と言われ、また尋ねられます。「そのほかにも火を点ける方法はあるかね。」妹が「ストーブの中から取ってくる」、と答えましたので、幼稚な答えにみんな笑いました。大先生も笑いながら妹に賛成されました。それから先生は私たちにこう言われました。「太陽も火を点けることができるんだよ。」私たちは少々疑問に思って、「本当ですか」と尋ねます。「では、点けてみよう。」大先生は虫眼鏡で太陽の光を集めると、火のついていない点火紙の先の部分に焦点を当てました。ほどなく、点火紙は炎を噴きました。まるで手品を見ているようで、私たちはひどく不思議に感じました。そこで大先生はまた光学についての常識を話して下さいだったのでした。大先生はつまりこのように私たちと一緒に遊びながら、随時私たちに科学知識を授けて下さったのでした。

大先生ご一家が磚塔胡同で住んでおられた北側の三部屋は、総面積三十平方メートル余りしかありませんでしたので部屋はとても狭く、白菜やたきぎはみな本棚の周りやベッドの下に積み上げられていました。特に大先生のお部屋は、寝室に応接間、それに一家の食堂を兼ねていましたが、夜にはもちろん彼の仕事部屋となり、まったくもって窮屈この上ないありさまでした。四合院には私たちの二家族しか住んでいませんでしたが、私と下の妹は幼く無知で遊びに夢中、一日中金切り声を上げて建物全体を騒然とさせてしまい、安らぐどころではありません。ある時、私たちが大先生のお母様のお部屋で大声でしゃべったり笑ったりしていると、大先生がやって来られ、笑みをたたえて私たちにこう言われたのを覚えています。「おまえたちはしゃべる時に、あまりがなり立ててはいけない。私は文章を書いているのだから、もしも今度おまえたちの話し声が聞こえたら、その内容を書き込んでしまうぞ。それでもいいかい？」それを聞いて私たちもやっとなおとなしくなったのですが、案の定長続きはしません。しばらくたって話が盛り上がると、声はまた響きわたります。あの頃の私たちの騒々しい叫び声や笑い声が、大先生の貴重なお時間とエネルギーをいっただれだけ無駄に消耗させたかを考えると、いま思い出しても申し訳ない気持ちで胸が一杯になります。

大先生は当時とてもお忙しくしておいででした。先生は教育部に勤務されるほかにも、北京大、北京師範大、女子師範大、世界語学校などで授業を担当しておられましたし、来訪者への応対や、さらには時間を割いて西三条の家の改修工事の手続き等の面倒もみなければなりません。このように多忙を極める状況にあっても、先生は毎日本を読み、文章を書き、翻訳をされましたが、それらの仕事は時に病をおして続けられたのです。先生はいつも深夜人が寝静まってから執筆をされました。一杯の濃いお茶に何度も湯を注ぎ、薄くなるとまた茶葉を足す、これは眠気覚ましのためでした。安物のタバコをひっきりなしに吸うのは、興奮剤で、お腹が空くとお菓子をつまみます。こうして、時には徹夜をして明け方に床につかれ、二、三時間寝るとすぐに教育部へ出勤、また次の日のお仕事の始まりです。計算してみると、大先生の睡眠時間は極めて少なかったことがわかります。

このような厳しい条件の下で、わずか九ヶ月余りの間に、大先生は『彷徨』に収める「祝福」「酒楼にて」「幸福な家庭」「石けん」の四篇の小説を執筆され、さらに『中国小説史略』の編纂と『嵇康集』の校勘作業を続けられ、また「宋民間のいわゆる小説及びその後について」及び「ノラは家を出たのちどうなったか」「天才の出る前」といった講演原稿なども書かれました。このほかにも大学の講義資料として文芸理論に関する文章の翻訳も手がけられています。・・・夜を日に継いで仕事に励まれる大先生のこうしたお姿は、私たちに深い印象を残しました。

1924年5月25日、大先生ご一家は西三条の新居へと引っ越されました。私たち姉妹三人も同じ日に磚塔胡同61号を離れることになりました。私たちのことを配慮して、大先生は私たちに先に行くようにと言われました。大家さんへの退去の手続きや、両家の転居先の新住所を門口に貼るというようなこまごましたことも、すべて大先生お一人で引き受けられたのです。

大先生とお別れするのは本当に名残惜しいものでした。九ヶ月余りという時間は、人の一生においては本当に短い一瞬に過ぎないでしょう。しかし磚塔胡同で大先生と過ごした日々の中で、辛抱強く人を教え導くお心と親しみ深く慈愛に溢れた先生のお姿は、私の幼い心の奥に忘れ去ることのできない印象を残しました。あれからもう50年以上たちましたが、一つ一つの出来事が今でも昨日のここのようにはっきりと目の前によみがえります。これらのことは、言葉ではなかなか語り尽

くせないし、数篇の文章に書ききれものではないのです。

笑い話でない笑い話

魯迅先生がお暇な時にはいつも、私たちは物語や笑い話を聞かせて下さるようお願いしました。先生のお話しは生き生きとして聞く者を飽きさせません。可笑しくてたまらないところになると、私たちはお腹を抱えて大笑いするのですが、先生はまじめくさった面持ちで何事もないかのようでした。

ある時、先生は次のような笑い話をして下さいました。ある家は3人家族で、お父さんとお母さんそれに十歳ほどの子供がおりました。ある日、お父さんとお母さんは出かけ、家には子供だけが残って留守番です。子供が寂しさと退屈を感じ始めたちょうどその時、ドアをノックする音がします。ドアを開けて出てみると、お父さんお母さんを訪ねてきた一人の見知らぬ人でした。客は子供に聞きました。「御尊父、御母堂はご在宅かな？」子供は、御尊父、御母堂がどういう意味かわからなかったので、目を丸くして茫然となり、長いこと考えていましたが、やっとこう言いました。「僕は“ごぼう”は何度も食べたことがあるけど“ごぼどう”は食べたことないよ」¹⁾、と。来客は笑って帰っていきました。父親と母親が帰宅して子供がこの話をすると、あに凶らんや、父親は血相変えて怒り出し、テーブルを叩いて叱りつけました。「御尊父とはつまり俺のことで、御母堂とはすなわちおまえの母ちゃんじゃ。このバカ者が！」子供は叱られてもさっぱり訳が分かりませんでした。怒った父親が怖くてその理由を尋ねる勇気はありませんでした。しかし、父親の口走った言葉だけはしっかりと脳裏に焼き付いたのです。数日たって、お父さんお母さんはまた出かけ、やはり子供が一人で留守番していました。うまい具合に、前回の見知らぬ人がまたやって来て尋ねました。「御尊父、御母堂は？」子供はすかさず答えました。「御尊父とはつまり俺のことで、御母堂とはすなわちおまえの母ちゃんじゃ。このバカ者が！」このお話に込められた、子供を無視した教育に対する諷刺の意味は本当に深く鋭いものです。

また別の時に、大先生はご自分が初めて教壇に立たれた時のことを話して下さいました。先生は日本から帰国して、浙江杭州両級師範学堂²⁾で化学と生理学を担当する教員になりました。彼のお話によれば、その時の学生の中には秀才出身の者もいて長い弁髪を垂らしていましたし、かなり高齢の者もいました。しかし彼自身は当時まだ数えて29歳にしかありませんでしたし、とても若く見えました。年かさの多くの学生たちは背後でこっそりとからかっていました。「こんなに若い教員とはな。俺の息子の方があいつよりもっと年上だよ。」と言う者もいれば、「俺の孫の方がまだ年上だ。」と言う者も。要するに、当時の大先生と彼の学生は年齢的には上下があべこべだったわけです。大先生は笑いながら、「学生たちは年とってはいたが、とつても無邪気でいたずらだったんだよ」、と仰いました。ある時、化学の時間に硫酸について講義され、大先生は学生たちに、硫酸

¹⁾ 原文では、客の言葉は「令尊、令堂在家吗？」で、子供の答えは「我吃过许多“糖”，可没有吃过“令糖”。」である。日本語では表せないので、仮に創作しておく。

²⁾ 浙江杭州両級師範学堂 正しくは、杭州（にあるところ）の浙江両級師範学堂。1908年開学。優級と初級の二段階に分かれ、優級は高校中学の教員養成、初級は小学校教員養成を行った。魯迅は1909年夏に日本から帰国後、生理衛生学教員として迎えられ、植物学の日本人教員鈴木珪寿の助手として授業の通訳も兼任した。

の腐食性が大変強く、もし皮膚にちょっとでもついたなら蜂に刺されたのと同じくらいの痛みを感じるのだと教えられました。・・・その後、実験を行っていた時、突然一人の学生が首の後ろを手で押さえながら叫び声を上げました。別の学生が竹の串を硫酸にちょっと浸してこっそり彼の後ろ首の上に垂らしたので、あまりの痛さに大声を上げたのでした。大先生は急いで駆け寄りこの学生に痛み止めの薬を塗ってやりました。

また別の時間、水素についての講義の時に、水素を燃やしてみせる実験をされました。大先生はフラスコに封入した純水素等の実験器具を持って教室までやって来て、マッチを忘れたことに気づき、すぐに職員室へ取りに戻られました。先生は教室を離れる時、学生たちに対して、フラスコの中に決して空気を入れないこと、さもなければ点火した時にフラスコは爆発して危険だからと口頭で注意されました。大先生は教室に戻り、水素は自然燃焼はしないが点火して燃やすことはできると説明しながら実験開始、マッチを擦ると水素の入ったフラスコへ近づけ点火しました。「ボンッ！」の音とともに、瞬く間にフラスコは爆発しました。大先生の両手は破裂の衝撃で負傷し、吹き出た血が出席簿や教壇それに衣服の上にしたたり落ちました。・・・しかしこのとき先生は自分の怪我を顧みることなく学生が負傷していないか気遣われたのです。教壇の上で行った実験ですから、仮に学生が負傷したとしたら手ではなくて顔面に傷を負うに違いありません。彼は慌てて学生の方をさっと見回し、そこでやっと安心しました。——なんと一番前の二列の席には誰も座っていませんでした。大先生はユーモアたっぷりに言われました。「彼らはフラスコに空気を入れるや、みんな後方へ撤退したというわけだ。」

大先生は続けて感慨深げにこう言われました。「これら年長の学生たちは、私というこの青年教師の話すことに対して、疑いの目を向けながらもやはり一方では信じていたことが分かる。何となれば、信じないからこそちょっと試してやれということだし、信じるからこそ、他人の身体で試してみたわけだね。」

何気ないコメントの中に、人間の心の奥底にひそむ醜い感情を鋭くえぐり出しています。事件からもう十何年も隔たっていましたが、大先生はこれらの思い出を話されながらも、学生を恨むような表情は全く見せられませんでした。しかし当時、学生のことを心から思いやるこうした先生のお気持ちと、人や物事に対する深い洞察は、私に強い印象を与えました。

最も信頼できるおとな

磚塔胡同を離れてから、私と妹は培根小学校へ転校しました。学校の規定により、新しく入学する者はみな保証書を提出せねばなりません。誰に私たちの保証人になって頂くのが良いだろうか。考えたあげく、私たちは大先生に思い当たり、そこで西三条へ行って大先生にお願いしました。西三条に着いて大先生の前に立った時、私は承知してもらえないのではないかと何となく不安でした。でもそれは全くの杞憂で、大先生は私たちが年端の行かない小学生だからと拒むことなど一切なく二つ返事で承諾され、すぐさま保証書を記入して印鑑を押して下さいました。保証書を私たちに渡して下さいました時、先生はとても優しく、しっかり勉強するんだよと声をかけて下さいました。大先生は私たちが最も尊敬し、最も信頼できるおとなでした。

楊蔭榆¹⁾一派との闘争

女師大騒動が起こった時、私は女師大附属小に通っていましたが、事件についての詳しい状況はよく分かりません。ただ大人たち、とりわけ大先生のお話の中から、楊蔭榆が悪い奴だということは知っていました。彼女は専制的で陰険で、学生を退学にし学校を解散させ、何でもやりたい放題でした。この時の騒動は主として彼女によって引き起こされたものです。

女師大騒動が激化していた頃のある日、私たち三姉妹が西三条に行ったところ、大先生のお母様がおっしゃるには、大先生はいまでもとてもお忙しくて昼も夜も外出されているとのことでした。後になって分かったのですが、大先生は女子大騒動の渦中であって、正義を貫き、進歩的な教員や学生たちと共に闘っておられました。学生自治会の招請にこたえて女師大校務委員会に参加され、北洋軍閥を後ろ盾にする楊蔭榆たち反動的なやからと妥協のない闘争を繰り広げられていたのです。

楊蔭榆と言えば、私には一つの出来事が思い出されます。大先生のお母様のお話によれば、大先生が西三条に引っ越されて間もなくのこと、楊蔭榆が招聘状をたずさえて大先生を訪ねて来たのだそうです。そのとき大先生は婉曲に断られたのですが、学生のことを第一に考えて後には招請に応じられたということです。

騒動が起こった後、大先生は進歩的学生の側に立って楊蔭榆や彼女の一昧に断固反対されました。彼女はそうした先生を敵視し、あらゆる策を講じて大先生を排除しようとしていました。しかし大先生は「いま私を追い出そうとしても、私は決して出て行かない」ときっぱり宣言されました。

女師大騒動の過程で、楊蔭榆は大先生と幾度となく涉り合いましたが、大先生を打ち負かすことは出来ません。あきらめきれない彼女は、こともあろうに直属の上司——教育部総長——章士釗²⁾をかつぎ出して“敵の包囲を解いて”もらおうとしたのです。章士釗は初め大先生を甘い言葉で誘って懐柔しようとし、人を介してこう伝えました。「君は“騒いで”はいけない。将来、君には女師大の学長を務めてもらうつもりなのだから」と。大先生は公明正大かつ決然とした態度で、「私が“騒ぐ”のは、なにも女師大学長になりたいがためではない」と答えられました。章士釗は策略が奏功しないと見てとるや、更なる陰謀を企てました。なんと職権を弄して不法にも大先生を教育部僉事の職から罷免したのです。事ここに至るや、大先生ももう彼を許してはおけず、法廷に告訴しました。大先生が免職されていた間（1925年8月から1926年1月まで）、私たちは大先生のことをとても心配しました。しかし大先生の方は胸に成算あり、落ち着いて対処しておられました。先生は一貫して道理に基づき正々堂々と力強く争われました。1926年1月、大先生は勝訴され、元の職に復するとの知らせが来ました。みなとても喜んだのですが、当の大先生は全く意に介さないご様子。教育部からも多くの人がやって来て彼に“喜びを述べ”たのですが、大先生

1) 楊蔭榆 (1887-1938) 江蘇省無錫の人。1907年日本留学、東京女子高等師範学校に入学、1912年卒業。1918年アメリカ留学、コロンビア大学にて教育学修士号を得る。帰国後、1924年2月に北京女子師範大学校長に就任、学校運営について魯迅らと激しく対立し、1925年8月辞職。その後は大学教員等を務めた。

2) 章士釗 (1881-1973) 湖南省長沙の人。辛亥革命時には反清活動に参加したが、五四運動以後は復古主義者となる。1924年から26年までのあいだ、段祺瑞政府の司法総長、兼教育総長に任命され、学生や民衆運動の鎮圧に参画した。1925年、女子大騒動が発生した後、魯迅が章士釗の学生弾圧行為と女師大解散措置に反対したため、章は8月12日、段祺瑞に対して魯迅を教育部僉事の職務から罷免するよう申請し、その翌日に公布された。8月22日、魯迅は平政院に章士釗を提訴した。その結果は勝訴となり、1926年1月17日に復職した。

はやはり淡々と応対され、時には頭を横に振って辞退される始末。今回のことで取り立てて“喜ぶ”べきものは何もないと考えておいでだったのです。後になって先生はこう言われました。「私は決して“飯の種”を失うことを恐れたのではない。章士釗らと争ったのは、あくまでも正義を守り通したかっただけなのだ。」と。

北京師範大での講演

大先生が1932年11月13日、お母様に会うために北京に帰省された時、私はすでに北京師範大の学生でした。私が西三条へ先生をお訪ねしたのは14日の午前だったことを覚えています。大先生が紹興におられた時の学生、宋紫佩¹⁾さんもその時来ておられました。大先生は私を見ると、「おまえはまた背が伸びたなあ」と言われ、何学部部に所属しているのか、学校の状況はどうかなどと尋ねられましたので、私はその一つ一つにお答えしました。続けて先生は微笑みながらこう言われました。「おまえたちは一日一日と成長していき、私たちは一日一日と老いさらばえていく。」その実、当時先生は闘いの先頭に立たれ、まさに頑強な革命戦士として活躍しておられたのです。その後、大先生のお母様の部屋で、壁にかけられた姪御さんの写真にペンで書き付けられた幾つかの文字を見ると、先生はすぐに宋紫佩さんに言われました。「いまの子供は文字を書くのがいい加減になってしまった。こんなにいびつで全くなっていない」と。この言葉には私に対する批判の意味も含まれていたと思います。当時、私はしょっちゅうお母様のために大先生あての手紙の代筆をしていました。私のいびつで下手くそな文字を、先生はいつも目にしておられたのです。

大先生が北京に戻られてまもなく、新聞には大活字で“魯迅、捲土重来せり”といった反動的なタイトルの記事が掲載されました。私たちはそれを見て腹が立つ一方で不安にもなりました。なぜならこの種の侮辱的な記事は、大先生の安全に決して有利には働かないからです。その日お昼ご飯を食べながらこの事に話が及びましたが、大先生ご本人は至って平然としておられます。「私が来たと言って、彼らは私が彼らの飯びつをたたき割ると思って恐れている。だが実際には私は彼らの飯びつのへりの部分をちょっとばかりたたくだけなのだよ。」そう言いながらついでに自分のご飯茶碗のへりを箸でちょっとたたいて見せます。「彼らが慌てふためいて右往左往する様子は、まったくお笑いぐさだ！」。また、「捲土重来」したなら必ず“捲土重去”するのが理の当然だ」とも仰いました。私たちが極めて深刻に考えていたことを先生はなんとこんなにも気楽に捉えておいでだったのです。ユーモアを交えたお話にみんなは思わず顔をほころばせたのでした。

大先生が北京に到着されると、“正人君子”たちはびくびくして一日として心が安まりませんが、逆に学生たちは非常に興奮して、魯迅先生を熱烈に歓迎しました。この時の大先生の北京滞在は15日間に過ぎませんでした。極めて忙しいものでした。多くの大学から学生がやって来て講演を依頼しましたが、時間の関係から先生は五つの大学の要請を受け入れることしか出来ませんでした。北京師範大もその中の一つだったのです。

魯迅先生の北京師範大における講演の題目は「再び第三種人を論ず」でした。講演当日（11月2

¹⁾ 宋紫佩 (1887-1952) 名は琳、紫佩 (子佩) は字。紹興の人。杭州の浙江兩級師範学堂での魯迅の教え子で、その後、紹興府中学堂では同僚となる。1913年、北京に移り、魯迅の紹介で京師図書館分館に奉職。魯迅が北京を離れるに当たってその後事を託された。

7日、ちょうど日曜日)の朝、校内に“師大文学研究社”署名の通知が張り出され、魯迅先生来校講演の題目、時間(午後2時)、それに場所(講堂・風雨運動場)が書かれていました。私は午後1時前後にはもう講堂に着いていましたが、その時にはすでにたくさんの聴衆が集まっていました。その後も人はどんどん増え、非常に混雑してきます。突然歓呼の声が上がり、拍手の音と共に人の群れが沸き返りました。「魯迅先生が来られた！」しかし待てど暮らせど大先生の入って来られる気配はありません。なんとその時には講堂の中も外も人で一杯だったために大先生は入ることが出来なかったのです。さて、大先生が演台までたどり着かれるとみな気持ちはいやが上にも高まります。この時誰かが大声で叫びました。「これでは聞こえない。大運動場へ行こう！」その一声で人々はまるで潮のように講堂から湧き出しました。大運動場のバレーコート付近に大きな四角いテーブルがしつらえてあり、大先生はその上に立って講演をされました。聴衆は速やかにテーブルの周りを取り囲み、前の者は座り後ろの者は立ってぎっしりと詰まっています。私は講堂の中では前の方の位置を占めていたのですが、運動場まで押し出されるや後ろの方になってしまいました。その日はかなり寒くて風もありましたが、当時は拡声器もなかった上に、大先生は周囲の聴衆を気遣って講演の最中に何度も向きを換えられたために、講演の内容はあまりよく聞き取れませんでした。いまでは記憶も薄れごく一部を覚えているだけです。この時の講演は主に、文学が階級や時代を超越したものだと主張するいわゆる“第三種人”に反駁を加えるものでした。大先生は例を挙げながら繰り返し説明されました。階級のある社会の中に階級を超えた作家などいない、中立公平な“第三種人”などは存在しないのだと。また講演の中で大先生はこう指摘されました。いまの文壇はすでに“皮鞋の足”の時代ではなく、“草鞋の足”の時代になった¹⁾。新興の文学芸術の発展は必然的な趨勢であり誰も遮り止めることは出来ないのだと。魯迅先生は労働者や農民といった大衆に近づき彼らと一致団結しなければならないことを諄々と説いて聞かせ、年若い学生たちを教え導かれたのです。

その当時は“九・一八”満州事変勃発のまさに一年後で、日本帝国主義は我が東北三省全体を強奪し、さらに戦火を関内にまで拡大しようと目論んでいた深刻な時期でした。国民党反動派は対外的には“無抵抗主義”を標榜して、日本帝国主義の侵略や蹂躪を野放しにし、対内的には“外敵を退けるにはまず国内の安定が必要”との反動政策を振りかざし愛国運動を躍起になって鎮圧しました。このような国難に直面し、民族滅亡に瀕する危機的な状況の下で青年学生たちの思想は混乱を極めていました。大先生のご講演はそうした曖昧模糊とした思いに明解な答えを与え、年若い学生たちに対して進むべき方向をはっきりと指し示されたのです。

私が大先生のこの講演を拝聴する機会を得られたのは、この上なく光栄なことでした。

魯迅先生はかつてこう言われました。「死んだ者がもしも生きている者の心の中にその影を留めなければ、それは真の死滅を意味する」と。魯迅先生が私達のものごとを去られてから45年にもなりますが、しかし彼の気高いお姿と崇高な資質、強靱な意志と頑強な闘争精神は、私達たちが常に前進し続けるよう永遠に励まして下さるのです。

1976年5月筆、1980年改訂

¹⁾ 原文：「皮鞋脚、草鞋脚」ブルジョアの履く「革靴」に対し、貧しい労働者の履く「草鞋」の比喩から、1930年代前後以降、無産階級文学を「草鞋脚」と呼ぶ。魯迅は茅盾とともに編んだ中国現代短編小説集を『草鞋脚』と名付け、1934年に序文を書いている(『且介亭雜文』所収)。